



二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

淫墮の姫騎士
THE PRINCESS KNIGHT "JANNE"
ジャンヌ

小説 筑摩十幸 挿絵 亀井
原作 桜沢 大

第一章

光翼の姫

006

第二章

悪魔の寄生体

067

第三章

地下室の牝囚

131

第四章

堕ちゆく身体

163

第五章

天使殺し
エンジェル・キラー

210

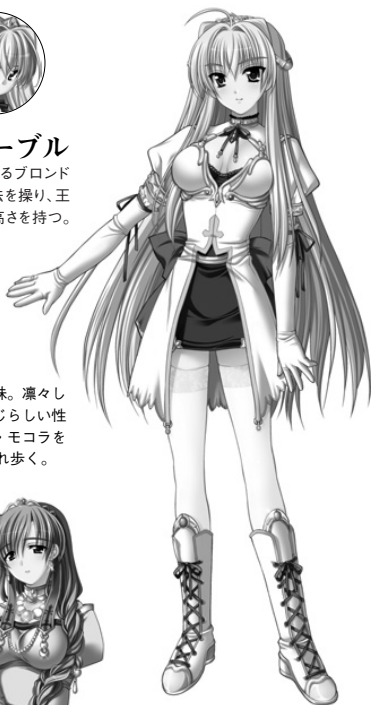
登場人物紹介

Characters



ジャンヌ・グルノーブル

伝説の天使の血を引くといわれるブロンドの姫君。鋭い剣捌きと強力な魔法を操り、王国を外敵から守る勇ましさと気高さを持つ。



ユーワ

ジャンヌの腹違いの妹。凛々しい姉に憧れ慕う、いじらしい性格の妹姫。巨大芋虫・モコラをペットとして常に連れ歩く。



セリーヌ

リブファールの女王。亡くなった王に代わり国を治めるユーワの母親。ジャンヌの継母にあたり、彼女に支えられながら善政を行う。



ジェリク

リブファールの乗っ取りを企む、ダークエルフの魔術師。

ギドー

粗暴なオーガ族のリーダー。並はずれた精力と怪力の持ち主。

キース

リブファール国の頼れる騎士長。

クチュ……クチュウウ……グクチュウウウツッ！

「きやあああうっ!! いやあああッ! ビクビクしちゃううっ!!」

すぐさま吸引とブラッシングが開始され、鋭すぎる刺激にユーワは全身を硬直させる。吸引を受けて勃起した木の芽は自然と包皮を剥かれてしまい、そこに細かな繊毛があらゆる方向から襲いかかるのだ。

初めて外気に触れた陰核表面の粘膜はとびきり敏感だ。電気を流されるような鋭利な感覚が、子宮を貫いて心臓を直撃する。

「う、嘘お……そんなに吸われたら……ひゃうっ!」

吸盤の中で、剥き出された三つの神経の束が下から上にハケで舐め上げられたり、毛先でチクチク突かれたりした。静電気を浴びせられるような刺激がツーンツーンと身体の内芯にまで染み込んでくる。

激しすぎる触手責めに、妹姫の肌はピンクに染まり身体中から夥しい汗が噴き出す。革靴の中で小さな指先がキュッと丸まった。水晶球の数値も激減し、三桁から二桁に突入しても、尚も減り続ける。

「なかなかいい反応をする。じっくり育ててみたいところだが……」

名残惜しように呟いたあと、魔導器の上に手を滑らせる。すると顔のそばで待機していたイソギンチャク触手が再び鎌首をもたげてきた。

「もういやだあ! ひゃめ……うつくううっ!」

抵抗も虚しく、花びらのような唇は強引に開かされ再び触手に占拠されてしまう。

(ま、また……入って……きちゃううっ！)

ズブズブと埋め込まれ、先端はまたしても食道付近にまで到達した。ズーンと響く衝撃で、華奢な身体がビクンビクンと波打った。

「ふぐう……！ んむむむうううっ!!」

ショートカットを振り乱し、苦しげに呻くユーワ。

しかしそれは、ユーワ自身驚くことに一回目よりも遙かにスムーズな侵入だった。匂いも味覚も嫌悪感はありません。そればかりか、擦られる喉の粘膜がジンジンと痺れ、魔液を注ぎ込まれる胃の中が熱く疼いてくるのだ。熱さのみならず、胃自体がドクンドクンと脈動し狂おしい波紋を全身に押し広げていく。まるで心臓が二つできたような圧迫感で、小さな胸が内側から張り裂けてしまいそうだ。

責め続けられる乳房とクリトリスの振動ともシンクロして、胸の奥に生まれた灼熱感は少女の心を甘く溶かしていく。身体の輪郭感覚があやふやになり、雲になったようなフワフワした心地に、魂も浮遊してくる。

(どうして……なんなの……これ……)

信じられない反応を見せる自分の身体に狼狽える間に、触手はズルズルと後退する。そして唇まで下がったあとには一気に反転して、再び喉まで掘削していく。

「ン……ム……ぐ……あううううッ！」

脱力した頭が後方に落ち、顎が反った。口から食道までが一直線になり、触手の動きはなめらかさを増す。長大なストロークがまるでファックするように唇を犯し、ゾクゾクと身体の中を駆け抜ける真つ赤な電流が、何度も脳底を直撃する。

さらにズブズブッと突き込まれるたびに、先ほどにも増して大量の腐液が喉奥に流し込まれる。

（もう、飲ませないでえ……おなか、裂けちゃう）

もう胃の中いっぱい粘液が充填されて、腹部がぼっこり膨らんでしまっていた。

一方でニップルに吸いついた触手も激しく脈動して吸引を強める。

（ンああああ……な、なに……？）

気がつくときつきた胸の二つの果実に異様な感触が張りつめている。疼痛と熱さがこみ上げ、先端部分に収束する。不気味な切迫感で呼吸が荒ぶり、双乳を突き出すように身体が反った。

そこに吸盤から鋭い針が撃ち込まれた！

「ヒィ——ッ!!」

ニップルに深々と針を刺され、声にならない声を出して、少女の身体がさらに反る。しかし、責めは終わらず、ユーワは塞がれた口の中で絶叫する。

「ヒッ！ キヒィィィィィィィィィィッ!!!」

最も敏感なクリトリスにも銀針が突き刺さったのだ。塗り込まれた粘液のせいで痛みは

ほとんどなかったが、大切な箇所を貫かれたショックが大きい。さらに胸にこみ上げていた熱が、その針にどんどん吸い込まれていくと、身体が異様な陶酔に包まれた。

「精気を吸われるのは気持ちいいだろう」

ジェリクが説明したが、ユーワにはそれを聞く余裕もない。限界まで我慢したオシッコをするような、妖しい解放感を延々と繰り返され意識までも吸い出されてしまいそうだ。

（どうして……痛いのに……からだが変わだよお）

小刻みな痙攣が何度も走り、ブルブルと腰が震え出す。まだ性感が未熟で自慰すら知らなかった処女の肉体が、悪魔的な責めで被虐の絶頂を刻まれようとしていた。

ジュブッ！　ズルズルッ！　ズブウウッ！

「んんっ！　あうん！　ふうんっ！」

喉まで届く激しいストロークに翻弄され、身体がドロドロに溶けてしまいそうだ。

（ああ……な、なにか……熱いものが……でちゃうう）

その熱は、次第に下降していき、実体感を伴ってユーワを狼狽えさせる。

「やっつと、濡れてきたか」

純粹無垢な身体を開発する悦びで、ジェリクが楽しげに嗤った。

（ぬ、濡れるって……なんなの……わたしどうなっちゃうの……）

濡れるという意味もわからない初はつなお姫様が、惑乱の表情を浮かべていると、ジェリクがククッと嗤う。

「触手に責められて感じてる、気持ちがいいってことだ」

（あうう……き、気持ちいいなんて……そんな……）

ますます混乱する妹姫だが、男の言葉通り未開の花園にはしつとりと透明な潤いが湧いて、処女の美肉を朝露のように飾っている。それはユーワがこの世に生まれて初めて湧かせてしまった花蜜だった。甘く芳醇な香りは、将来の性感豊かな成長を予感させる。

「ふぐ……はふンン……あふうン」

いつしか漏れ出る声も艶めいて、光を失った碧眼は情欲にとろけていく。いやらしく小鼻を膨らませ、鼻梁を抜ける吐息は灼けるような熱さだ。

（ああ……なにか、なにか……きちゃう……っ）

得体の知れない切迫感に煽られ、仰向けの腰が持ち上がり、割り広げられた太腿がピクピク震え出す。悩ましくうねる腰は、少女とは思えないセクシーさで男の目を楽しませる。「そろそろだな」

ジェリクの冷酷な赤眼が見つめる水晶の中、例の数値が一桁に割り込んで、ついに「零」になる。

その瞬間、喉奥でイソギンチャク触手がブルブルッと震えた。

ドブドブドブッ！ ドビュウウウッ！ と一際大量の魔液が呪詛とともにユーワの中に撃ち込まれた。続けて三方所の針からも雷撃のような呪力が放たれ、ニップルとクリトリスを刺し貫く。



「うう……」

ビクッと肩が震え、絶望の吐息が漏れる。当然、性体験などなく、自分以外に聖域に触れられるのは初めてだった。しかも相手が化け物とあつては、いくら気の強い王女でも恐怖を抑えきれない。血の気を失った頬がヒクヒク引きつった。

「フフフ、悔しいか？ まあ、処女は残しておいてやるから安心しろ」

青ざめた美貌を見下ろし、ダークエルフが嘲笑う。

（なんとこの屈辱なの……こんな奴に……）

ジャンヌは悔しげに睨み返すが、手も足も出せない今の状況ではなんの役にも立たなかった。

生意気な姫にお仕置きをするように、魔物の生殖管がグリグリとパンティの底部を押し揉み、粘液を染み込ませる。その粘液は胸に塗られたものと同種のものらしく、たちまち布が溶け落ち、大きな穴が開けられてしまった。忍び込む空気の冷たさが、貞操の危機を姫に告げてくる。

そこから覗く秘唇はブロンドのアンダーヘアに飾られ、人知れず咲く夜の花のように美しく輝いていた。綺麗に左右揃った厚めの花びらの内側に、薄く柔らかな桃色の花びらが慎ましく閉じ合っている。

まるで蜂蜜を塗り込んだようにしっとり潤んだ粘膜は、まだ女の悦びを知らぬ蕾でありながら、牡を誘う色気を滲ませる。

もちろんそれは魔物が吐きかけた粘液で、ジャンヌ自身が濡らしているわけではないのだが、潤滑効果としては十分なようで、透明の管がいよいよ膣孔に侵入を開始する。

「くう……っ！」

ひりつくような痛みとともに、管の先端が処女膜の小さな裂孔に潜り込む。

小指の先程度の挿入で処女膜も健在だったが、汚辱感は消しようながない。絶望感に追い打ちをかけるように、生殖管の先端から膣内に向けて、いきなり白濁粘液がドバァッ！と噴き出した。

「まずは洗淨だ」

「うああああああつ!!」

自分でも触れたことがない媚粘膜に、生まれて初めて刻まれたのは灼熱の衝撃。これまで感じたことのない熱さに、悲鳴が迸る。

それは単なる熱さではなく、身体の奥深く秘めていた女としての『肉』を揺さぶり起こすような一撃だった。

(……汚された……汚されてしまった)

絶望の淵に追い込まれ、一瞬騎士長の顔が頭を掠めた。

だが異生物による陵辱のショックも冷めないうちに、新たな激感が王女を襲う。粘液に濡れた媚肉襞がジンジンと疼き、灼熱感が奥深くに伝播し始めたのだ。まるで無数の火の粉をお腹の中にばらまかれたような熱さだった。それは乳房の甘い疼きとも共鳴して、身

体中の神経をざわめかせる。

（う……う……う……な、なに……これ……？）

燃え上がる粘膜が、これまで生理の時以外意識したこともない膣洞や子宮の位置を伝えてくる。その火照りきった媚粘膜が挿入されてくる冷たい細管に驚いてキュッと収縮した。「ククク。以前実験用に改造した女はオーガの子を十人は産まされていたが、寄生体が定着すれば、お前もそうなるのだ」

「そ、そんな……」

愛する人の子供を産むという神聖な行為までけがされ、家畜のように獣人どもの子を産まされる。絶望のあまり身体を強張らせると、胎内に恐るべき悪魔の受胎器官の存在をハッキリ感じ取り、おぞましさに歯がカチカチ鳴った。

そのとき半分まで侵入した管の先端が、徐々に膨らみ始めた。処女膜を通過している部分は細いままに、先端だけが王女の膣内で膨張していく。

「あぐうう……な、なんなの……!？」

身体を内側から拓ひらかれていく異様な感覚にジャンヌが戸惑う間にも、先端部分はどんどん大きくなっていく。膣内で風船が膨らむような感じだ。

「うああああ……」

ミシミシと処女地を軋こませる圧迫感に、白い顎が反る。予想を超えた陵辱の連続で、押さえつけられた手の先でギュウッと拳が握られた。

処女姫を苦しめる膨張体はウズラの卵ほどの大きさにまで成長し、さらに小さな突起が無数に生えていく。そして最終的には細長い軸の先にイボの生えた球体を取りつけたような形態になった。

「お前を処女のまま犯すための特別製だ。たっぷり味わえ」

ジェリクの言葉に合わせ、責め具がゆっくり動き始めた。イボ球が柔襷を押し広げながらジワジワ進んでいく。

「うくう……痛……やめなさいっ！」

未開の秘肉が少しずつほぐされ、拓かれていくのがハッキリわかった。注がれた粘液のせいか苦痛は少ないが、異物の挿入感是十分すぎる。

（こんな……こんな化け物なんか……！）

処女膜自体は無事でも陵辱されていることに変わりはない。乙女の最も神聖な箇所を冒瀡される悲しみと悔しさで胸が裂けそうだ。

王女の苦悩などお構いなしに、魔物の生殖管はさらに白濁粘液を吐き出して、処女肉を甘く溶かしながら侵入を続行する。

そしてついに生殖管の細い部分は完全にジャンヌの膣内に埋まってしまう。イボ球をズンと子宮に食い込まされて、ジャンヌは苦しげに眉をたわめた。

「はあ、はあ……」

痛みはほとんどないものの、違和感は相当なものだ。聖域を傷つけられるのではないか

と思うと、怖くて身動きもできない。だがそれで陵辱が終わったわけではない。生殖器官は贅肉を引っ掻きながらゆっくり後退し、処女膜を内側からノックした。そこから再び前進し、子宮の底を押し上げる。その動きを化け物とは思えない繊細さで繰り返した。

(な、なんなの……この感覚……?)

イボ球が最奥に達する瞬間の重々しい圧迫感、膣口付近まで引き抜かれるときの粘膜まで引っ張られるような一瞬の寂寥感。処女のジャンヌにとって未知の感覚が、何度も何度も襲いかかってくる。執拗に繰り返されるたびに感覚は鋭さを増し、疼くような電流が何度も背筋を走り抜けた。

「うう……ンンッ」

頭では理解できなくとも、勝手に反応を始めてしまうのが女の身体だ。擦られ続ける粘膜からはトロミのある粘液が染み出して、淫靡な水音を響かせる。

くちゅ……ずちゅ……ぐちゅ……!

魔物の粘液と乙女の蜜液が膣内でシェイクされて泡立ち、白濁した混合液が処女孔からトロトロとこぼれてきた。

「お姫様はなかなか淫乱の素質がおありのようだ。絶倫揃いのオーガ族の牝奴隷に相応しい素材だな」

ジェリクが赤い瞳を歪ませて嗤ったが、輝きを失わない剣姫の碧眼は敵を睨み、復讐の記憶を脳裏に焼きつける。

「ハアハア……どんなに汚されても……わたくしの心までは……墮とせないわ！」

「ふふふ、どこまで強がりが続くかな。ほら、準備が終わったようだよ」

「キチキチキチ……」

魔生物が顎を鳴らしながら尻尾を揺さぶった。すると白濁で満たされている生殖管内にいくつもの赤い粒が混ざり始める。生殖管先端のイボ球体が奥深く突き入れられ、子宮口に食い込んだ。

「いよいよ寄生体の卵が入るぞ」

ジャンヌにとってその言葉は死刑宣告に等しい。

「そんなのいやよっ！ やめなさいっ!!」

さすがの王女も平静を保てず狂ったようにブロンドを振りたくるが、拘束はふりほどけない。じつくり狙いを定めた管の中で注射器のごとく白濁が圧縮され、次の瞬間剣姫の腔内に卵もろとも一気に撃ち込まれる。

ブシュッ！ ブシュッ!! ブジュウウウッ!!

「うあああああああああッッ！」

高圧の濁流が子宮口を貫いて、子宮内部に達する。

(なにかが入って……! ああ……熱いいいっ!!)

熱膿を流し込まれるような熱さと重量感。溢れ出る粘液と卵が膣孔からもビュウッと噴き出す、大半は子宮内に注入されてしまった。

しかし産卵はそれで終わったわけではない。空になった生殖管にすぐさま新たな粘液と卵が充填されるや、ブッシュウウウウィツツと再び行われる高圧噴射。胎内で熱流が渦巻いて攪拌され、卵が内膜にぶつかって暴れ回った。

「も、もう…入れる…シンあああああああつっ!!」

凄まじい注入は液体に犯されるという表現がぴったりくるほど。勢いで子宮が持ち上がり、衝撃は頭頂にまでズキンと突き抜ける。ブーツのつま先が痙攣でビクビクした。

「まだまだ、あと十回は続くぞ。たつぷり化け物の卵を受け取れ」

「か、必ず……くはあああつ！ 復讐してあげますわ。絶対に……ゆ、許さな……あああああつ!!」

最後の氣力を振り絞って相手を睨んだジャンヌだったが、連続する産卵噴射に意識まで流され、そのまま氣を失ってしまった。

「終わったのか、ジェリク？」

二本角のオーガが白濁にまみれグッタリしている姫を見つめていやらしい嗤いを浮かべる。重傷から復活したばかりだというのに、股間は凄まじい勢いで勃起している。

「ああ、だが寄生体が定着するまでしばらくは使用不能だ。我慢しろよ」

オーガ族の食欲さに呆れながら、ジェリクは王女の脚の間にしゃがみ込んだ。

大量の卵を産みつけられ、ジャンヌの下腹は僅かに膨らんでいる。そのお臍の下、子宮



さらに食い込む三角の拷問台。身体を縦に裂かれるような衝撃を味わわれ、ジャンヌは後ろ手縛りの背中を弓なりに反らせた。踏ん張りが利かなくなつて全体重がかかった股間が圧迫され、決壊寸前の堤防を揺さぶる。衝撃がいつぱいに恥水を満たされた膀胱に伝わり、今にも破裂してしまいそうだ。

「こんな……ひ、卑劣な……あく……ンああっ！」

「肌に触れてるわけではないだろう。約束を守っているのに卑劣呼ばわりは心外だな」

恨めしそうな視線を向けるジャンヌに嘲笑で応え、ジェリクは別の魔導器を操作した。すると天井から二本の金属製の触手がスルスルと降りてきて、王女の前にはぶら下がった。

「な……な、なにを……する気ですの！」

触手の先端がカニの爪のように開くのを見て、新たな恐怖がこみ上げる。すでに尿意は限界を超えていた。これ以上の責めに耐えられるのか、まったく自信がない。

「ついでに魔力も吸収しておこうと思つてな。これからは一日一回、ここで小便と魔力を搾ってやる」

屈辱の言葉を浴びせられ、姫の顔がますます赤くなる。排尿を管理され、魔力を搾取される。まるで家畜のような扱いではないか。妹を人質に取られていなければとつくに舌を嚙んでいるだろう。

「そいつはいいな」

「これからも毎日見にきてやるぜ、お漏らし姫様」

ますますオーガどものボルテージが上がり、熱気が部屋に満ちていく。

（今は……今は我慢ですわ……）

目を閉じてジッと息を潜める。たとえ恥を晒すことになろうとも、取り乱すことだけはすまいと心に決めた。心を石のように凍らせてしまうのだ。

「む？ 急に静かになりやがったな」

「ふふ、さすがだな。そうでなくてはつまらない」

怪訝な顔をするギドーに対して、ジェリクは心底嬉しそうだ。

王女を追いつめるべく、カニの爪が乳房を拘束する十字帯の中心を突くと、ベルトは四方に弾け飛んだ。鎖もそこで円形に開口し、敏感なニップルが搾り出されるようにツンと突き出す。

そのいびつに歪んだ先端に、金属触手のギザギザの爪がガッチリ噛みついた。

「あくう……っ!!」

予想以上の鋭痛が乳脂肪に突き刺さり、ジャンヌは喉を軋ませた。拘束で張りつめた乳肌をチェインメイルで擦られ続けたせいで感度が数倍に高められていたのだ。

「こ、これしき……はうっ!」

次の瞬間魔力吸収が始まって、王女の背筋が反る。

（うああ……力が……抜けて……）

まるで乳房の中に手を突っ込まれて、魔力を引きずり出されていくような感覚だ。せつ

かく回復した僅かな力もジワジワと削り取られてしまう。

「あつ……くつ……んん……絶対……ま、負けませんわよ」

意識まで吸い出されそうになりながらも、ギリギリのところで踏ん張る。必死に氣の流れをコントロールして吸収される魔力を最低限に抑え込んだ。

だが生意気な姫を屈服させようと、さらに三角台も細かく振動を開始する。

「んああああ！ そんなあ……下からも……はあうっ……！」

上下から激しく責め立てられ、こらえきれない悲鳴が唇を震わせた。さらに食い込む拷問台から淫らな振動がクレヴァスにねじ込まれてくる。敏感な肉真珠が押し潰され、捏ね回されるたびに、痛苦と混ざり合った妖しい感覚が直下から突き上げた。その刺激はダイレクトに膀胱を震わせ、尿意を爆発的に高める。

（や、やだ……このままじゃ……漏れちゃう……！）

子宮や膀胱に響く振動のせいで集中が途切れると、振動でブルブル震えている乳房から魔力を吸われるのを止められなくなる。

それは三日前魔生物に吸われたときより遙かに強力だった。吸引のストローを乳の奥深く差し込まれて吸われているような感覚だ。そして吸われるほどに、逆に乳房は張りつめ、チェインメイルの下でパンパンに膨らんでいく。そうして高まった圧力が剥き出しの乳頭に集中し、焼けつく熱さとともに吸い出されていく。

「ハア、ハア、ハア……胸が……ウンンッ！」

激しく揺さぶられながら、ジャンヌは苦しげに悶えた。吸われる二つの乳頭と揉み潰されるクリトリスからの刺激が互いに共鳴して、全身の神経をざわめかせる。そのたびに背中や腰がビクンビクンと震えて、ブロンドがザッと波打った。増幅された尿意で膀胱が破裂してしまいそうだ。

「そろそろお漏らししたくなってきたんじゃないか」

「うう……っ！ そんな……ああっ！ ……こと… あ、ありませんわっ！」

生汗を搾り取られながらも、青い瞳は鬼気迫るほど輝いて徹底抗戦を主張する。

（……耐えなきゃ……絶対に……こんな奴らの前で……粗相など……っ！）

背中では拘束された手をギュッと握りしめ、喰い縛る白い歯を煌めかせる。全身の力を集中して小さな孔を締めつけた。

「なかなか頑張るな」

これほどジャンヌが耐えるとは思っていなかったのか。ジェリクの声に僅かに驚きの色が混じる。

「だがこれには耐えられまい！」

ジェリクがザッと手をかざした。

ザワザワザワッ！！

「きゃああっ！ な、なにっ？ ああああッッ！！」

いきなりチェインメールが蠢き始めた。鎧を構成する鎖の一つ一つが微妙に振動しながら

ら全身の肌を甘噛みする。たまらず姫の身体が天井を向くほど反り返った。

さらにメイルの乳房やお尻の部分に手形が浮き上がり、あたかも見えない手が這い回っているようだ。

「やめなさ……くはあ！ く、くすぐ……ひいっ！」

胸や太腿などを責められるのに加えて、脇腹やお臍などにも手形が次々に現れ、強烈なくすぐり責めに晒される。

「うああああっ！ や、やめ……ひやあああああッツ!! ヒッ、ヒイ——ッ!!」

絶叫を無視してジェリクはさらに威力を強めた。夥しい汗がドッと噴き出し、生きているように蠢くチェインメイルの下で肌が妖しく濡れ光る。

そして悶えれば悶えるほど、股間に台が食い込んで王女を苦しめた。

（お、お股が……あ、熱く……）

そこに痛みとは異なる感覚が芽生えているのに気づいて、慄然とするジャンヌ。三角台と恥骨に挟まれた部分から、ツーンツーンと心臓にまで響くような疼きが広がってくる。

（わ、わたくしの身体……一体……どうなってしまったの……?）

考えようとしても甘美なさざ波が脳の奥底を揺さぶり、思考を寸断する。そして意志力が弱まれば、力は吸われ放題なのだ。

「ああ……だめ……だめえ！」

生きた鎧によって乳房全体が脈動するように疼き、熱い塊が次々と触手に吸い出されていく。さらに鎖の手がギュッと根元を締めつけて、乳房を搾るように圧迫した。

「うっくう……！」

頂点に開いた円形の孔^{あな}から、乳肉そのものが搾り出されそうなほど無惨に変形され、王女の唇から苦鳴が漏れる。

その孔から突出し、普段の倍近く膨らんだ乳頭から、大量の魔力が迸り、触手に吸い込まれていく。そして鎧の振動に反応したのか、お腹の中の寄生体までもが暴れ出し、胎内から魔力を吸い始めた。

（いやあああああつ！ そんな…お腹も…ここ、これ以上吸わないでっ！）

異様な感覚が続けざまに襲いかかる。三カ所の鋭痛と三カ所の吸引、それらが全身を包むくすぐり責めによってリンクし、混ざり合って身体を中心に流れ込んでくる。意識がドロドロに溶けて真っ白に濁り、我知らず腰が前後に揺れ始めた。擦りつけられるクレヴァスとの間から、僅かだが湿った音が漏れ始める。

「ヒヒヒ、尻を振ってやがるぜ」

「ひょっとして濡らしているんじゃないのか」

ギドーたちの嘲笑う声が聞こえたが、もう身体が言うことを聞かない。執拗な愛撫を浴びせられながら魔力を極限まで吸引され、ジャンヌの中でなにかが狂い始める。

張りつめた魔力が吸われるときの、膨張感からの解放が次第に心地よくなってくる。そ

してその解放を今最も望む箇所が、小さな尿孔だ。

我慢したいのか、自ら堤防を崩したいのか、自分でもわからないまま秘孔の辺りをグリグリ押しつけてしまう。

限界を超えた膀胱に振動がビンビン響き、締めつける括約筋は焼き切れそうだ。

「ふ……ああ……ンンあああつ!!」

「フッフ、苦しむがいい、ジャンヌよ。……俺の苦しみを味わうがいい!」

激しい憎悪を宿した赤眼がキラリと輝く。と、同時に股裂きの触手が最大の力で下に引っ張られた。

「アアア——ツツ!!」

鋭角の食い込みがトドメの一撃となってジャンヌの意識までも断ち切った。絶叫とともにプロンドが逆立つ。頭の中に赤い火花が散って、魂が蒸発したように思考が停止する。反り返った腰が突き出され、つま先まで痙攣した脚がギュッと拷問台を挟みつけた。次の瞬間、

「ダメッ! もうダメエエエエエツツ!!」

プッシャアアアアアアアアアツツ!!

ついに激熱の液体が迸る。魔法で処理してあるのか呪符を貫通したオシッコは、一条の熱泉となって高々と前方にアーチを描く。溜めに溜めたぶん勢いは強く、乙女の羞恥を掻き立てた。



「そろそろくわえていただきましたようか、姫様」

男根全体が唾液に濡れ光り始めたころ、ゴルドンが次の命令を下した。王女の混乱を見透かしたような絶妙のタイミングだ。

(調子に……乗って……)

姫様と呼ばれるたびに、心臓を小さな針で突かれるような痛みを感じ、ジャンヌは屈辱に歯噛みした。

「……はあ……はあ……わ、わかりましたわ」

ペールを押さえ、なるべく顔の露出を抑えながらおぞましい亀頭に唇を被せていく。

「う……く……」

なんとか先端を受け入れると熱気と匂いがますます強くなって口中に広がった。王女である自分が家臣の男根を吸いしゃぶり、それを大勢に見られているなど、とても信じられなかった。すべてが悪夢なのだと思いついた。だが絶え間なく舌に擦りつけられる異臭と味は、それが紛れもない事実だと告げている。

(……やるしかないのですわ……)

覚悟を決めて、片手を添えながら思いきり開いた唇が髭面騎士のペニスを吞み込んでいく。舌や頬の柔らかな粘膜に触れる熱さに驚き、肺腑に流れ込む爛れた淫臭に目眩を覚える。

「うおお……これはすごい、吸いついてくる」

ゴルドンがたまらず呻き声を上げた。技術はまだ拙くとも、その粘膜の感触は天性の名器であった。くわえさせているだけで、熱い快感がペニスに染み込んでくる。そこを前後にしごかれれば、とろけるような快感がペニスの中を走り抜け、早くも射精してしまいうになる。

「くそ、早く俺もやりてえ」

太った兵士が待ちきれない様子で背後から抱きついてきた。

「あっ……ちよ……ちよっと……ああンっ！」

奇襲を受けて抗議するジャンヌだが、男は構わずブロンドに顔を埋めて高貴な香りを樂しみ、豊乳を搾るように揉む。さらに伸びた手が聖域をうかがい始める。

「ずっと気になっていたんだが、これはなんの札だ？」

四つん這いで股も広げているため、妖しげな紋様はすべて男たちの前に晒してしまっていた。

「本番は禁止ってことじゃないか」

「けっ、気取りやがって。それにしちゃあ、随分湿っているみたいだな」

呪符の中心部、縦長の瞳のような紋様が描かれている辺りに、男の指が這う。

「ン……あふン……そこは……だめです……クチュ……あンッ！」

必死に抗議したところで、男根に唇を奪われていては触られ放題の状態だ。薄い紙越しに膣孔を弄られ、ジワジワと染みが広がっていくのを抑えられない。

「ここも感度がよさそうだ」

ひとしきり処女の蜜孔をいたぶった指が移動し、赤いポイントにピッタリとあてがわれた。そこはちょうどクリトリスの位置。紋様自体が彼女の女性器かたどを象るように描かれているので、探すのは簡単だった。

「ふうぐっ！」

鋭い快感が突き刺さり、王女は塞がれた唇に悲鳴をくぐもらせた。これまで数日間の調教で身体はますます敏感になっており、その感覚は鮮烈だった。

子宮がキュウッと収縮し、溢れ出た蜜で呪符に新たな染みを作ってしまう。つま先が反り返っては、何度もビクビクと背を反らせた。

（ああ……なんて無礼な……んぐっ……さ、触らないでっ……！）

王女である自分が家臣二人に弄ばれて、なにもできないのがあまりに惨めだった。

だが心は汚辱でズタズタに引き裂かれていくのに、肉体は裏切りの昂奮状態に突入していた。ますます精液への渴望が強まり、喉の奥がざわめき始める。控えめだった舌も、積極的に肉洞に絡みつき始めた。

「んっ……んっ……んくっ……」

真っ赤に上気した頬を窄めては、ブロンドを揺らしながらの抽送を繰り返す。もはや太腿も閉じることはなく、さらなる玩弄を望むように腰がクネクネ揺れ始めた。すると生理的嫌悪や吐き気が薄紙を剥がすように消えていき、おぞましいはずの牡臭も気にならなく

なってくる。むしろ汚されると思うことが、得体の知れない昂奮を呼び起こすほどだ。

「色っぽい顔してケツを振ってやがる」

「まるでサカリのついた牝犬だな」

王女の淫気にあてられ、観衆のボルテージも徐々に上がっていく。

（ど、どうなってしまったの……こんなに汚されているのに……こんなに恥ずかしいのに……？）

自分自身の変化を信じられず、王女は盛んに睫毛をしばたかせた。自分の肉体が思っていた以上に侵蝕されてしまったことを実感させられ、愕然とする。

「おお……また一段とよくなってきたぞ。たまらん、姫様はマ○コみたいな唇をしておられる」

ゴルドンはブルブルと身体を震えさせ始めた。予想以上の快感で、早くも絶頂が訪れようとしていた。

カリの裏や鈴口の上などの快楽ポイントが、甘く熱い粘膜に包まれ、舌で突き回される。とろけるような感覚に男根が呑み込まれてしまいそうだ。激情に誘われるままに男の腰も前後に激しく動き出す。

「むぐ……っ！ う……っ！ んぐぐっ！」

喉奥を挟まれる息苦しさに耐えながら、ジャンヌも舌の動きを強めていく。

グラグラと頭を揺さぶられ、衝撃と息苦しさに意識がぼんやりしてくる。さらに乳房を

捏ねられ、淫核に小円を描くようなマッサージを受けて、苦しみと快感が入り交じり始める。甘い痺れが脳を叩き、閉じた瞼の奥にチカチカと小さな火花が散る。

（ま、まずいですわ……）

自分自身が相当追い込まれているのはわかっていた。男たちの前で痴態を晒すことを避けるためには、この異常な行為に狂わされる前にすべてを終わらせてしまおうしかない。

（うう……早く、出しなさいっ！）

息を切らせながらラストスパートに入る。身体全体を前後に揺すりながら、シユポシユポと肉棒をストロークさせ続ける。唇の端から涎が流れ落ち、喉を濡らしていくが構っていられなかった。

（早く……早く……う）

うつすら開いた瞼の中、青い瞳がジワリと潤む。汗を浮かせた額に貼りついた前髪や、いやらしく膨らんだ小鼻がなんとも悩ましい。

その姿は本人にその気がなくとも、周囲から見れば精液をねだる淫乱娼婦以外の何物でもなかった。

「うおお、ジャンヌ姫様の……口に、出すぞ！」

ゴルドンは大きな声で憧れの姫の名を呼ぶ。偶像を汚す悦びが昂奮を高め、一気に官能中枢を燃え上がらせた。凶暴さを増した腰遣いで、ペニスを最奥にまで突き込んだ。

「出るぞっ!! 全部飲み干せっ!!」



ブルブルッと胴部を震わせたあと、ゴルドンのペニスが白濁を噴き出した。
ドビュウウウッ！ ビュルルルウウッ!!

「んぐくっ！」

ぶちまけられる大量の精液が舌の上で跳ね返って、頬の裏や顎の裏に絡みつく。ねっとりとしたトロミが塩辛い味と火傷しそうな熱を王女の粘膜に染み込ませた。

（うう……なんて……ひどい味なの……）

家臣による汚辱の洗礼。吐き気をこらえ、不潔な淫欲の塊を屈辱とともに無理矢理喉に送り込む。ネバネバが糸を引いてなかなか飲み込めないのがますます不快だった。

ごきゅつと喉が鳴り、熱い塊が喉を下っていくのがハッキリわかった。家臣の精液を啜り飲み、それをまた兵士に見られていると思うと絶望的な気持ちになってくる。

（でも……まだ、負けたわけでは……ありませんわ）

まだ胸の奥で怒りの感情が燃えてくれるのが頼もしい。それがあろうちは、まだ闘える。
「はあはあ……っ、次はどなたかしら？」

ボールの下、唇の端についた精液をペロリと舐め取り、兵士たちに挑戦的な眼差しを向けるジャンヌ。子宮の疼きも氣力を振り絞って抑えつける。

「よし、じゃあ次は俺だ」

さっきまで背中になっていた兵士が進み出て、ゴルドンに代わって椅子に座る。

「乳でやってくれよ。早く頼むぜ」

焦った様子で勃起を剥き出しにし、肥満兵士が急^せぎ立てた。よほど待ち遠しかったのか、すでに亀頭先端は先走り露に濡れ光っている。

「胸で……？ わかりましたわ」

経験はなくとも、おおよその見当はついた。しかしその為には胸を露出させねばならない。家臣たちの前で乳房をさらけ出すのはかなり抵抗があつたが、妹を救うのだという決意が王女の手を動かした。

緊張で震える手で胸元をはだけると、膨乳された乳房がブルンとこぼれ出た。夥しい汗にキラキラ輝くスイカ並の豊乳。乳房だけでなく、たびたび魔力吸収の接点に使われた乳首と乳輪も、妊婦のように大きく成長して色も赤みを増している。

「おお……すごい……いやらしいおっぱいだな」

「でけえ……牛みたいだ。たまんねえぜ」

見つめる男たちから思わず唸り声が漏れる。涎を垂らしそうな者や身を乗り出して見つめる者など、全員が強烈な淫気に吞み込まれていた。卑猥な台詞とともに鋭い視線が乳白色の乳肌に降り注ぐ。すぐにでも隠したい気持ちと裏腹に、背筋をピンと伸ばしこれ見よがしに双乳を突き出す。

（みんなが……見て……る）

一国の王女である自分が、その家臣の前で乳房を見せつけている。そう思うだけでゾクゾクと胸の奥がざわめき、恥ずかしさに溶け込んだ被虐の情感が脳幹を麻痺させる。

「おお、なんと熱く柔らかいのじゃ」

異種族ペニスによる二穴責めを完成させ、亜人の長たちは上機嫌である。

「ああ……うあああつ！」

二つの肉穴の狭間で、凄まじい快楽の火花が散った。ギドーに処女を奪われ、感度が一段と高くなったようだ。二人の亜人のペニスを体内に感じさせられるだけで、身も心も溶けてしまいそうになる。女にされた秘肉の奥底がゴブリンに精液を注ぎ込んでもらいたくて、熱く疼き始めた。尻穴も同様で、オークの精液が欲しくてたまらない。気が狂いそうな渴望に身体が支配されていく。

「ハアハア……ああ……」

腰が動き出しそうになるのを必死にこらえるジャンヌ。寄生体による肉体改造の威力をまざまざと実感させられ、奴隷転落の恐怖と絶望がジャンヌの胸を黒く染めていった。

（し、しっかり……するのよ……まだ……負けてはダメ！）

眉根に縦皺をきゅつと刻んで荒ぶる淫欲を抑えつける。今自分は亜人たちの同盟のダシに使われているのだ。ここで屈すれば、リプファールはさらなる脅威にさらされることになる。美しい国を亜人たちに蹂躪されるわけにはいかない。家族のためにも国のためにも、今こそ全身全霊をかけて、耐えるときだ。ジャンヌはきつく唇を噛み締め、あらゆる肉体感覚を意識から追い出そうと試みる。

「ひひひ、我慢しておるのか。かわいい牝め」

皺だらけの顔にいやらしい笑みを浮かべたルグリーが、素早くジャンヌの唇を奪った。

「む……ううっ」

カサカサの唇が押しあてられ、続けて蛭ひるのように長い舌が差し込まれてきた。

「や、やめて……むぐぐっ！」

激しい嫌悪でうなじが鳥肌立つ。なんとか押し返そうと思ったが二穴を犯されていては、顎に力が入らない。ついに根負けしたように舌の侵入を許してしまう。

チュパ……チュプ……クチュ……。

「んん——っ！」

菌茎や上顎の裏をくすぐるように動いたかと思えば、舌の根に蛇のように絡みついている。ヤニ臭いゴブリンの唾液がドクドクと流し込まれ、為す術なく嚥下えんかさせられた。そうかと思えば舌が思いきり吸い取られ、王女の唾液も吸り飲まれてしまう。

異様にねっちょいディープキスを受けているうちに、次第に頭の芯が痺れて思考がまともになくなってきた。唇もまた敏感な性感帯にされてしまったのだと思い知らされる。

「ヒヒヒ。唇も感じるようじゃな。きゅうきゅう締めつけてくるわい」

ひとしきり唇を堪能したあと、老ゴブリンはいよいよ腰を動かし始めた。

「そんなわけ……ああ……むっ！」

半立ちペニスに膣肉を挟り分けられて、ゾクリと腰椎が震えた。ルグリーの言う通り、唇に連動したようにヴァギナが収縮し、男根に絡みついていく。不気味な温もりや形状が

よりはつきり感じられてしまう。

「ほ、本当か……じゃ、じゃあ俺にもキスするダ」

「いや……ううっ！」

頸が後ろにねじ曲げられ、今度はオークに唇を吸われた。

べっとり分厚い唇や、豚鼻が美貌を歪ませるように押しつけられる。涎や鼻水を塗られたくられ、ジャンヌは悲鳴を上げた。その唇に豚舌がゾブリと差し込まれた。

「むぐううっっ！」

まるで残飯のような異臭を放つ肉塊が、王女の可憐な唇を割り裂き、喉奥にまでねじ込まれる。

（く、悔しい……！ こんな奴らに……）

汚辱感に神経が焼き切れそうになるが、汚らしいオークの舌を拒むことができない。口腔内を舐め回され舌を吸いしゃぶられるうちに、頭はますます痺れて、視界も桃色の霞がかかったようにぼやけてくる。

「ブアッ！ ブハアッ！ うめえ、うめえ……さすが天使様、最高の唇ダ。それにケツも、締めつけてくるダよ」

オークが歓喜の声を上げ、極太肉棒で肛門をズブズブと犯しまくった。出し入れのたびに内臓が捲りかえりそうな衝撃が身体を貫き、その直後爛れる様な快美感がズーンと骨盤にまで染み込む。

「う……あ……あ……ンっ！」

グリスドンが腰を振るたびに荒い鼻息が耳をくすぐり、王女の昏迷に拍車をかける。臉が異様に重くなり、今にも意識が飛ばされそうになるが、ジャンヌは盛んに瞬きを繰り返して抗った。

「ううむ。今までいろんな女を犯してきたが、これほどの女は初めてじゃ。久しぶりに熱くなってきたわい。ほれ、いつまでもオークとじゃれていないで、こっちにもキスをするのじゃ」

深い皺の刻まれた顔に昂奮の汗を浮かせたルグリーが、焦れたように王女の疑似ペニスをぎゅっと握った。

「はひい……いっつ！　そ、そこは、だめえっ！」

強烈な刺激を受けて跳ね上がったジャンヌのおとがいが、老ゴブリンの枯れ枝のような手につかまれる。

「ひひひ、この唇がまた、たまらんのじゃ」

再びゴブリンがジャンヌの唇を奪い、息もつかせぬ勢いでディープキスを繰り返す。

「んぐ……んぐ……はあはあ……ンン……ッ！」

巫人と美姫の唾液が混ざり合い、唇の端から溢れて糸を引きながら落ちていく。

激しく子宮口を突き上げてくるゴブリンのペニスが、膣肉の中でムクムクと硬度を増していくのがわかった。

(ああ……ああ……アレが……大きく……なってる)

自分の秘肉が、しなびた老巫人のモノを完全な勃起状態に導いたのだと思うと、植えつけられた奴隷の悦びが頭をもたげてくる。それが膣肉にフィードバックされ、熱さを増した柔褻が大量の果汁を溢れさせながらゴブリンの男根に絡みついていく。

「プフ、お、俺もダ。こんな気持ちいいケツマ○コは初めてだよ」

オークが醜い豚顔をほころばせ、ジャンヌの唇をゴ布林から奪い返す。

ぶちゅ……ちゅぶつ……じゅる……ちゅうう……。

「んぐ……ああ……アفن……むふ……っ」

薄汚い生ゴミの匂いのする最低のキスの味。だがそれに対して、剣姫は明確に拒絶の態度を取れなくなっていた。

異種族の化け物のような男たちに唇を吸われ、唾液を注がれながら、舌を絡ませあう。そんな背徳行為への嫌悪感も徐々に薄れ、むしろ妖しい昂奮を呼び起こされてしまう。二本の男根に犯され続けるうちに、子宮に生じた熱い塊が全身に拡散して、肌が油を塗られたように妖艶に輝き始める。

豚顔の表面を覆う獣毛に首筋を撫でられながら、直下からの杭打ちを肛門に叩き込まれると、灼熱の快美電撃がお尻から背骨を震わせながら駆け上がる。オークの極太に馴染んでしまった括約筋が、男根をもっと深くくわえ込もうと淫靡に蠢く。

その間も『天使殺し』による触手責めは続いていた。触手に絡みつかれた光翼は目に見



えて輝きを失い、背中にダラリとしなだれている。一方で射精を封じられたままの疑似ペニスには吸盤触手がたつぷりと媚毒をまぶしながら、チュパチュパとバキュームフエラを繰り返している。灼けつくような快感が魔根の中を何度も駆け上がり、出口を求めて荒れ狂う。根元を縛られていなければ、とつくに射精していただろう。

（ああ……アソコも、お尻も、オチンチンも……全部……変になるう……）

巫人たちの執拗な責めが功を奏して、王女は徐々に淫婦へと生まれ変わっていく。

「どうじゃ、天にも昇る気持ちであろうが？」

矢継ぎ早に、またしてもゴブリンの口吻。大量に注がれる唾液も、喉を震わせて飲み干す。今や完全復活した肉棒がこれでもかと媚肉を刺し貫く。硬度を増したぶん、オークの巨根と擦れ合う二本差しの威力も倍加していた。

赤い波動が血肉を狂わせながら、身体中の性感帯へ燃え広がっていく。

「ああああ……ああん！ き、気持ちよくなんか……ああああっ！」

白い喉を反らせて身悶える王女。必死の抵抗を示すように、金髪を波打たせ弱々しく頸を左右に振った。しかし、王女がもう後戻りできないところまで昇らされ、陥落寸前なのは誰の目にも明らかだった。

「プフフッ！ オ、オマ○コもケツマ○コもおいしそうにチンポくわえて、ぐしょ濡れじや、説得力がねえダよ」

すぐさまオークの濃厚な接吻。もはや抵抗を失った王女の唇を、思う存分吸いしゃぶる。

グリスドンの言葉通り、二本差しで責められる媚肉と肛門は、すでに完全屈服の様相を呈していた。

ズブリ……グチュッ……ジュブッ……クチュクチュッ……！

二人の亜人の獣根が交互にあるいは同時に前後の孔を抉るたび、もはやどちらの穴かもわからない淫水が飛び散り、淫靡な水音が広場に響く。その泥濘状態の花園の上では、寄生体の射精管が根元を封じられたままビクンビクンと苦しげに脈打っていた。

「あんなに気持ちよさそうな顔して、天使の姫もざまあねえな」

「さすがゴ布林族とオーク族の長だな。あのジャンヌがメロメロじゃねえか」

「あの様子なら、今日で墮ちるぜ。生意気な剣姫の最期が拝めるぞ」

亜人たちはサディスティックな昂奮に酔った表情で、王女陵辱を見つめている。かつて無敵の強さを誇った美しい魔法剣の使い手が、魔生物と亜人によって罅られ尽くされていくのは、最高の見せ物だった。

「アッ……アン……ふぁ……もう……はう、うう……ンっ！ もう、やめてえ……」

ついに声も抑えられなくなり、艶やかな嬌声が王女の唇からこぼれ落ちる。下腹を駆けめぐり魔根に蓄えられていく激烈な淫気が内から王女を蝕んでいく。

処女を破られたせいなのか、寄生体による肉体改造が進んだせいなのか、あるいは翼の力を奪われているからなのか。今のジャンヌは、牝たちの激しい責めにまったく対抗できないのだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

全国書店で
**好評
発売中**

借金返済のため、お嬢様が工事現場で肉体労働：ストリップまで!?
セレブ界も格差社会だ!!

42兆円踏み倒して
やりますわ
**借金お嬢
クリス**
2

小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁



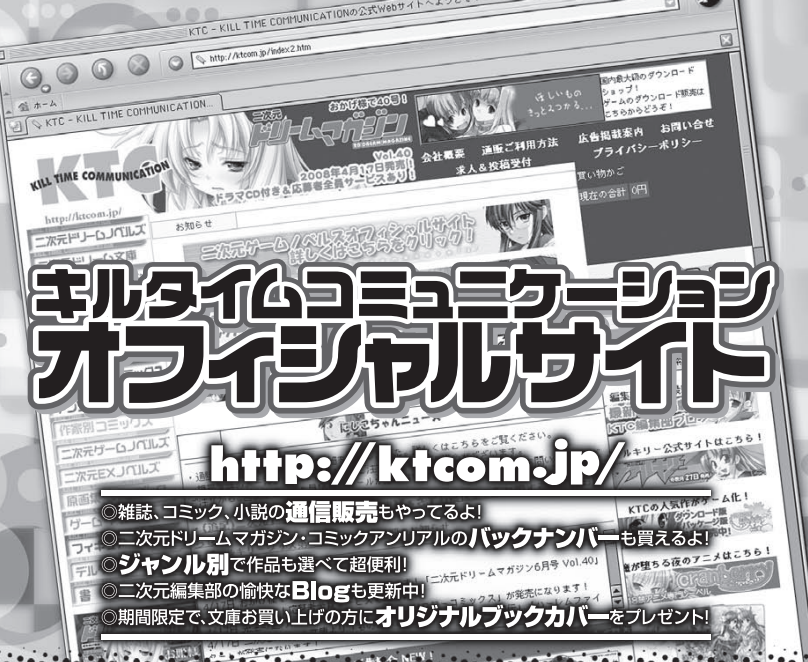
全国書店で
**好評
発売中**

セレブな生活を取り戻すために
魔物にバトルを挑む元・令嬢!

小説/筑摩十幸 挿絵/了藤誠仁

42兆円を踏み倒して
やりますわ
**借金お嬢
クリス**





<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!